

量地指南後篇卷之二

勢南 處士 村井昌弘編述

器用解

磁石切用

大凡磁石を用るの品數種有りといへども何の時も針頭と子  
 の方小安しき方位を定むるハ古今の極法なりと  
 第一小見込様小口傳り。假令ハ子此支を求る時。通俗大体ハ  
 午の線より子の線を見込し常なり。其事悪し。左すれど安  
 居分明なり。海ものなるも。只小直上よりして見込む。前後  
 隔り見る時ハ外見ハ中なる如しといへども。多分中らざるもの也  
 眼精散やすれ故なり。是を第一の習とせ  
 磁石の塵とつゝしつゝ。或ハ振様小より。寫の十分も中り。又ハ

量地指南後篇卷之二



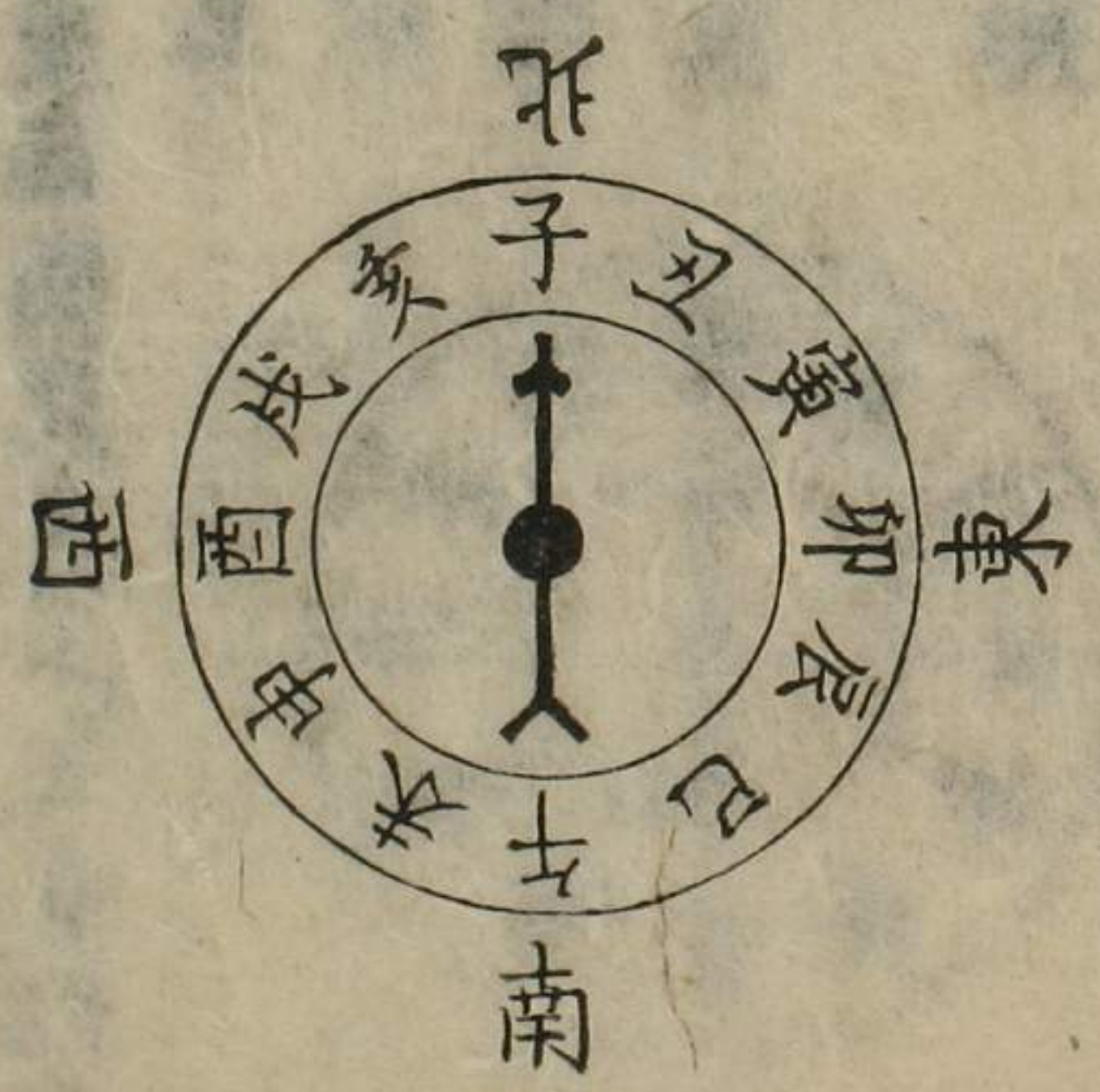
支の九分も中るしつり。是眼目及むる処也。是と塵と云  
 たり。此所おてハ小差といへども。彼地おてハ里町お延る故ハ大差  
 とかる理なり。心を用ひく塵なら。アにナシ  
 塵を隠すといふしつり。右小述るごとく。磁石小塵出るごとく  
 ても大業のこれ此語と捨て可扱ものなり。故お止くと得ずして  
 必用る也。此器ハ圖形を成お至て分間おて少く心と用ゆ也  
 遠里遠町を小圖お寫せば。必分間縮るものなり。茲お於て  
 自然小塵の隠る理もつり

亦順逆の振様といふあり。假令ハ左方右方と一度も量る  
 たら。進と行るは先の當支とは。順お用ひ跡の當支を反  
 逆お用るなり。或ハ子を午小用ひ酉を卯小用るがごとく。是  
 なり。是逆なるがごとくといへども。實ハ順略を用る意也。此儀

業にわけて大益つり

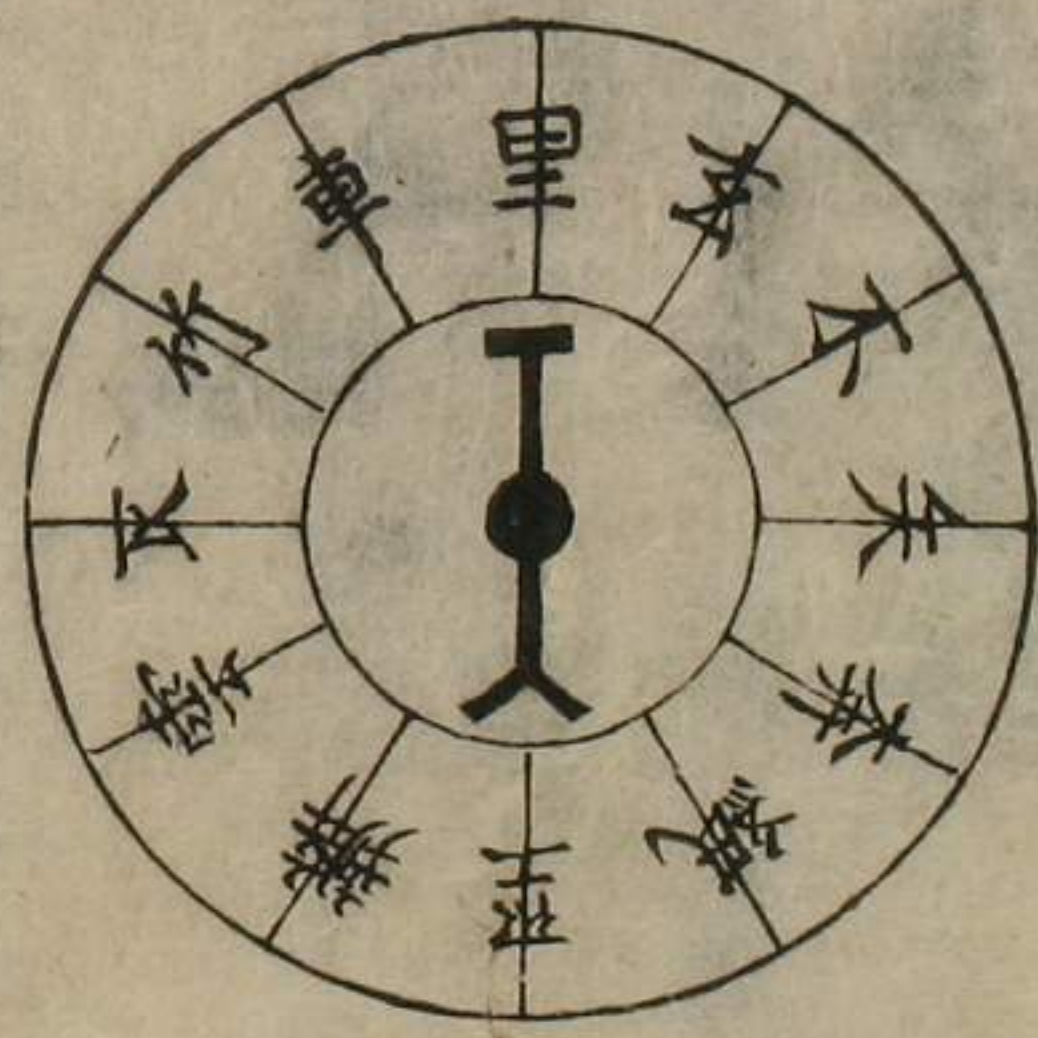
又高下の地おおてハ振様別あり。凡て磁石ハ少くも傾く  
 時ハ。釵先太居物なり。故ハ山坡などお於て振らるハ規矩  
 元器槽を用ひく。勾倍を寫して。其通を見込也。磁石とハ少  
 しも傾るがごとく。安お居て

振るなり。亦振分といふおと  
 つり。小業おて度々磁針と振  
 時ハ微塵はりりて顯るお依て  
 是を厭ひて所おより振出して  
 塵を一偏お聚めざるがごとくお  
 するなり



隱銘といふしつり。磁石の東西南北十二支小隠語を以て

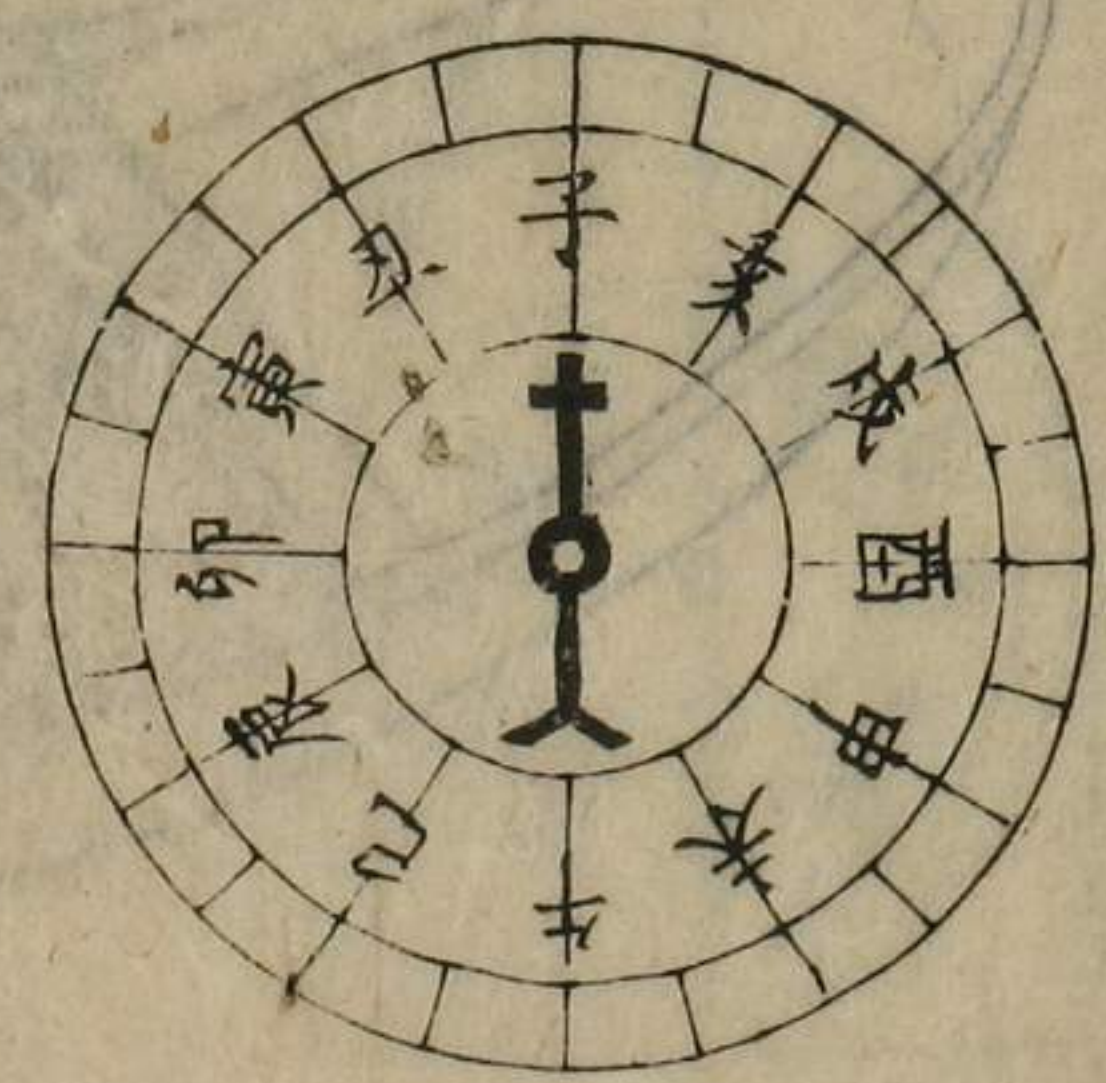
記す。是はいろいろ好事の作とて、或は錢を以て、他を愚ふすの  
 作めて、其の益有りとも見へば、其の東西南北とて、子を長短輕  
 重の四字に作る。是即子午卯酉也。  
 是ハ易ヨ云。木者長。金者短。火者輕。水  
 者重。といふ語あり。其基く外八支ハ  
 車竹雲辨紙奔不支の八字に替り、其  
 字意を考ふる。甚笑ふ堪たり。



逆磁石といふもの有り。逆目磁石共  
 常小反して。十二支を左へ配りて  
 逆小居るもの有り。右の隱銘の條小述る所。即是なり。今初  
 學隱字の解ぐ。たを通曉し。安か。る。爲。正。字。と。以。て  
 記す。此逆支。船路。又ハ。國圖。小用る。多し。往々其用所ハ

便利の用法を記す

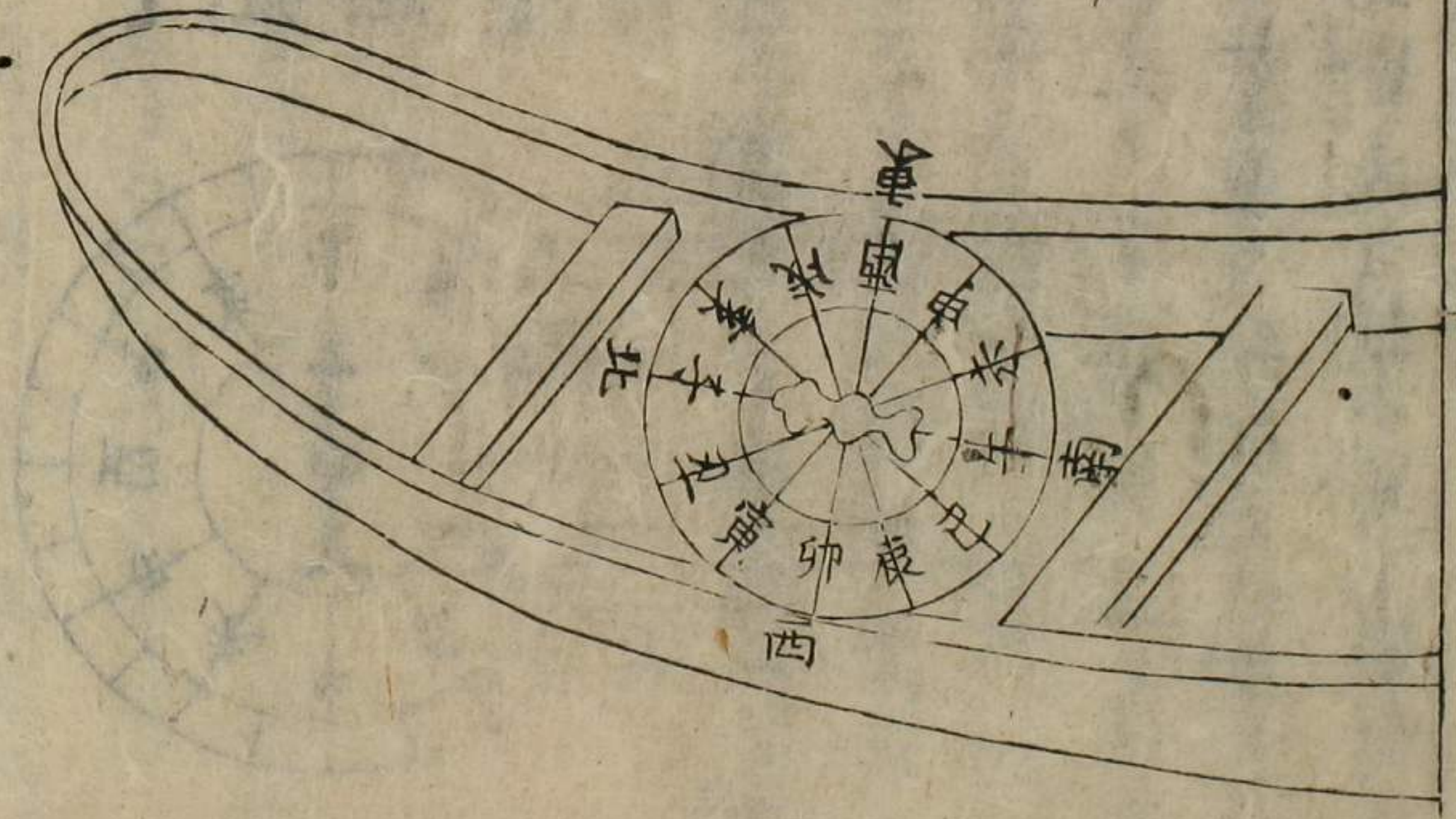
逆磁石といふもの有り。左小委く述たり。其用船  
 上小有りて。陸地ハ甚益あり。其制常例小反して。左  
 方へ十二支を配分し。方位を見る。か。何の



時も一先子支と磁針と。北方小當然して。後磁針と欲  
 する方小有り。是其用なり。南北験時ハ。子支ハ  
 南小有りて。磁針ハ午に向ふ。又酉小向て。酉を指し。東に向ハ  
 卯と指す。磁針と四方配分の十二支と。交會を論じ。以て  
 磁針の指とて。其欲する。方。徒。知。る。方。航。上。の。用。と。云  
 ハ。海中へ船を乗出さんとする。此逆支を紙小寫し。磁針と

こも小船を正當の北に向ひて免  
船中の平直なる所小張付壁に  
南方趣くんと欲せば其時ふつと  
磁針の鋒の午支小當るやう一船と  
押廻し漕出すたると余是小働で  
知るるこ

忍磁石といふ器あり。是ハ密り小其  
直程又ハ其地理を寫しこゝんとす  
時他人の見顯すこと厭ひて忍び  
やふ事法なると此法なり。或ハ此  
器と立覽器ともいふ。小丸を臺小  
仕掛て掌の内にて當支を振ると



方角と求め。或ハ里町と知り。或も

圖形をあつたす此業なり

右用法づれも忍の術也

古傳云凡国郡の形を尽す

いふも方角回町を求るふ。此術

を以て成すといふこゝろ。尤當

支と求め知ると本といふ間町と

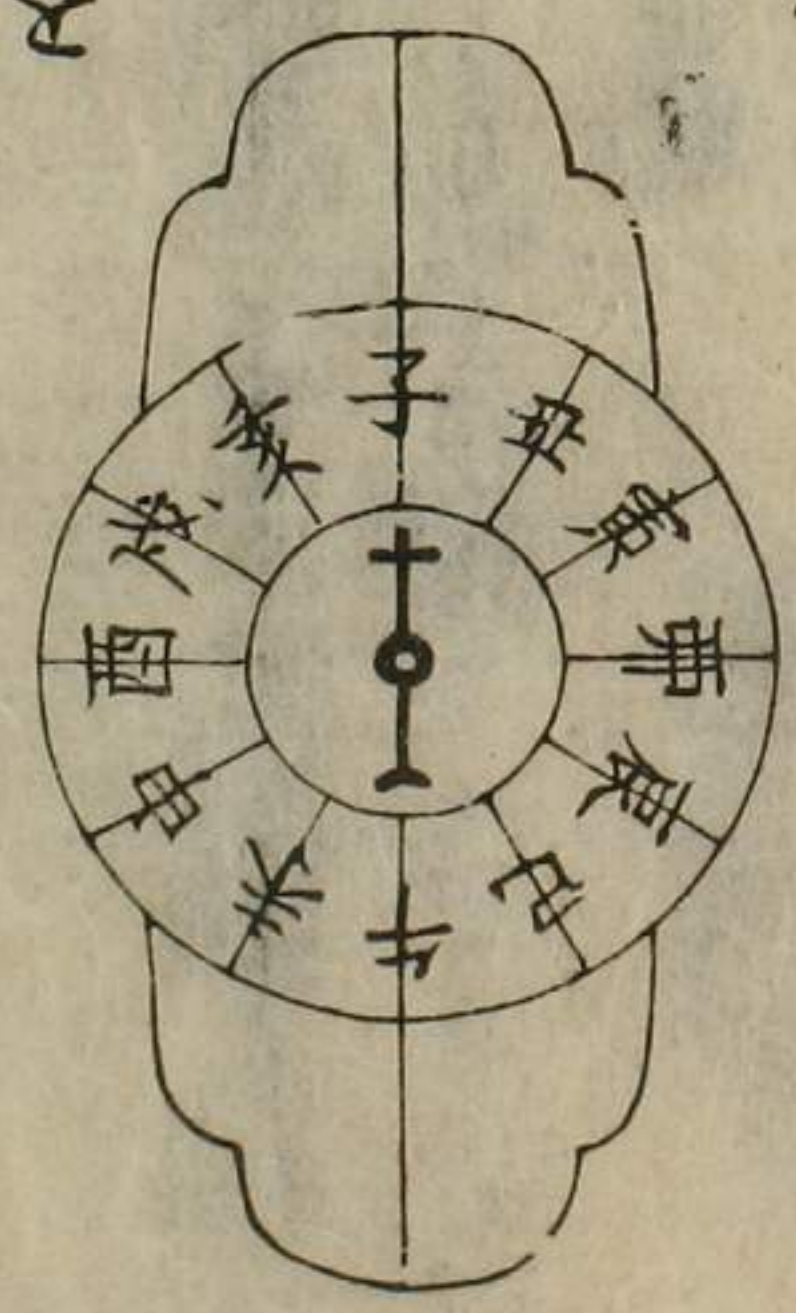
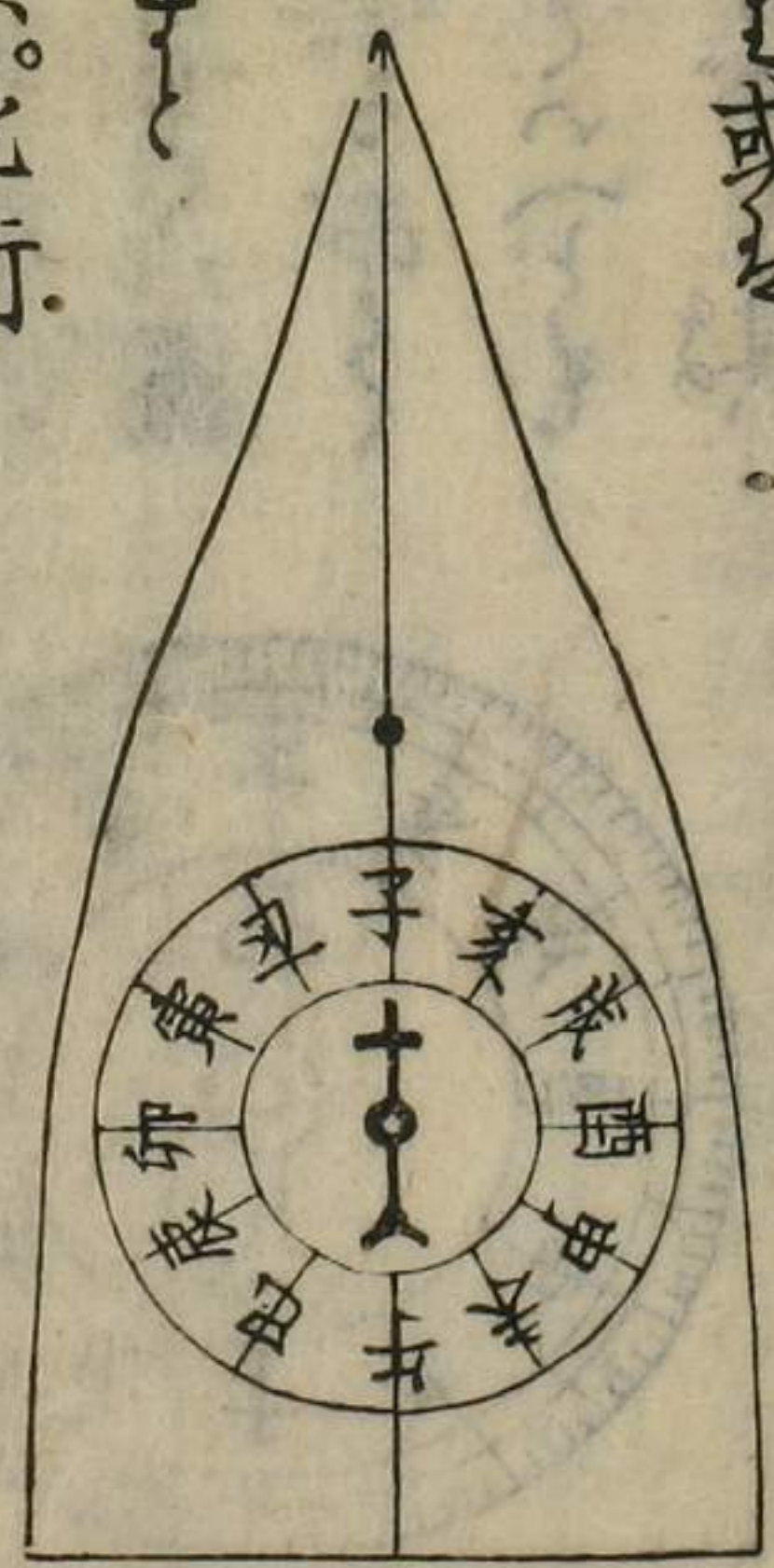
定るといふ歩行をもつて相試

む。すて忍の術ハ能陰藏とるを

專要といふ。其事法慎むべし。又地里の量法時宜ふら。千變

万化の働さつり。免角一身規矩の術小満ざる。たはらむを

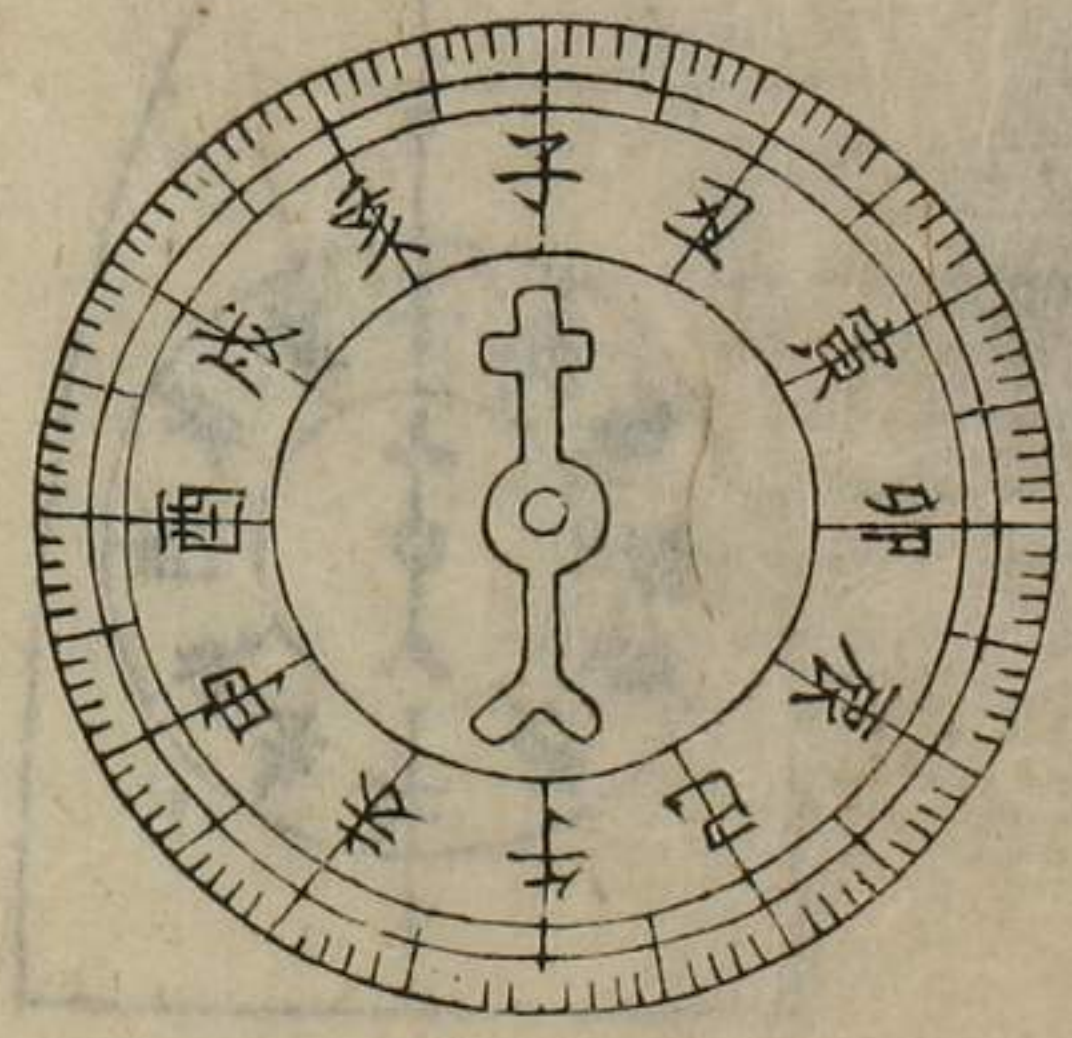
得が。尤筆談小尽す。くは口傳云云



此器ハ胸小膺て用ひ。又杖の末小載て量る。立覽器と名け  
る。立たなぐ。小覽の意なり。常小用ひ馴て益あり。試  
習ふる。

小丸之用

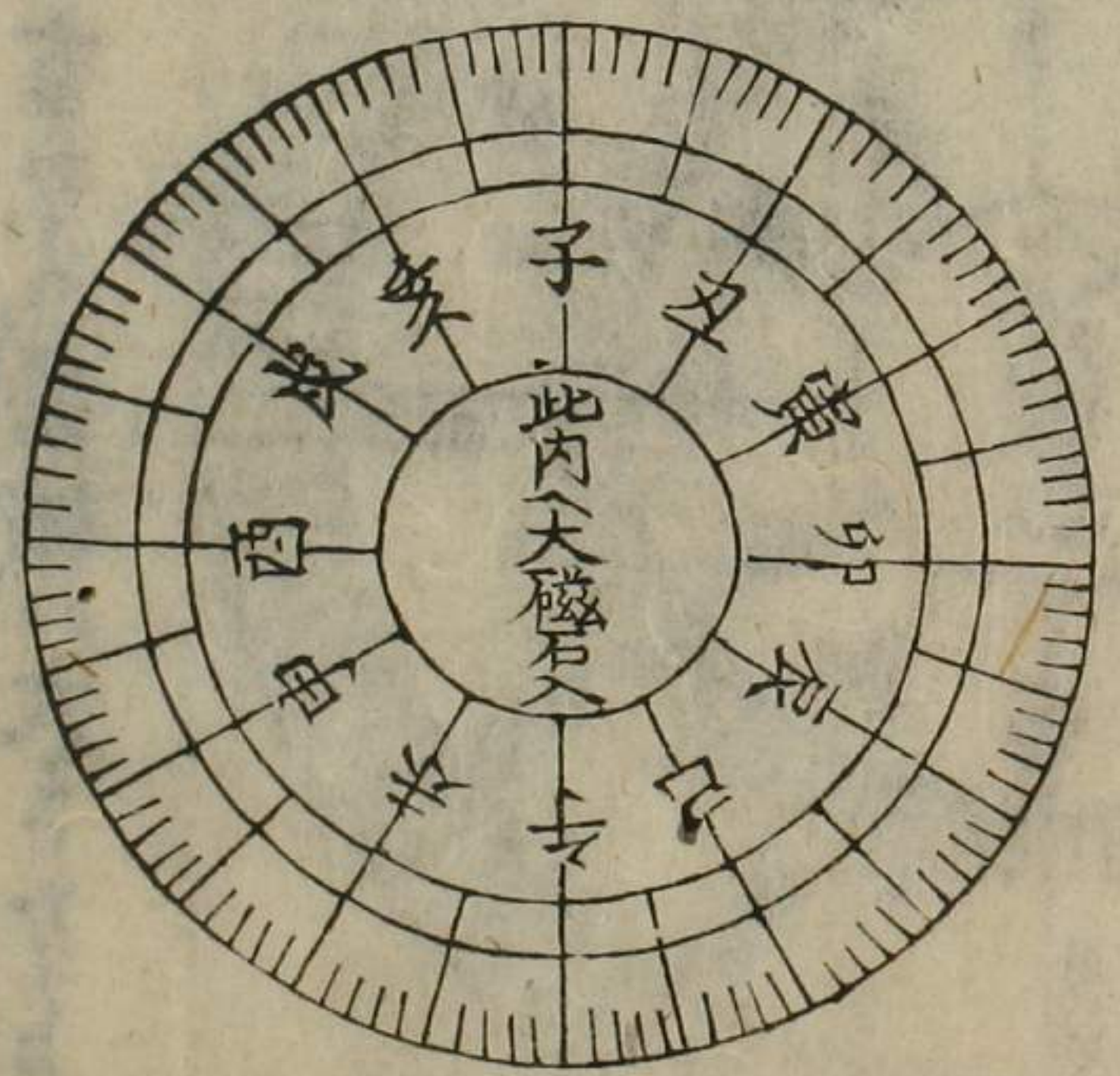
小丸ハ其制真鍮を以て作る。徑度二寸五分。真中小徑一寸  
程磁針を藏る凹殻を穿つ。而して下に圖するごとく。二段の  
間用を廻し。内の一段ハ十二支と配  
當し。外の一段ハ一支毎に十分乃  
線を刺し。大略此のごとく。委くハ圖  
を見て辨ふる。扱右小述るごとく  
全徑二寸五分大略なりといへども  
先ハ是を以て定法と知るべし。其



故ハ大丸ハ一尺也。中丸ハ大丸の半減。徑五寸也。然ハ小丸ハ中  
丸の半減。徑二寸五分也。是と定法となして然る。其用品々有。  
盤針術。元器術ハ全く此器と用ず。て扱ふもの。忍磁石。立  
覽器。隨川器。又ハ一本術等も。其術皆此器と主と。其用法ハ  
各元器。大丸。中丸。忍磁石。立覽器。隨川器。一本術の用法と以て  
考へ知べし。煩くは爰小載す。

中丸之用

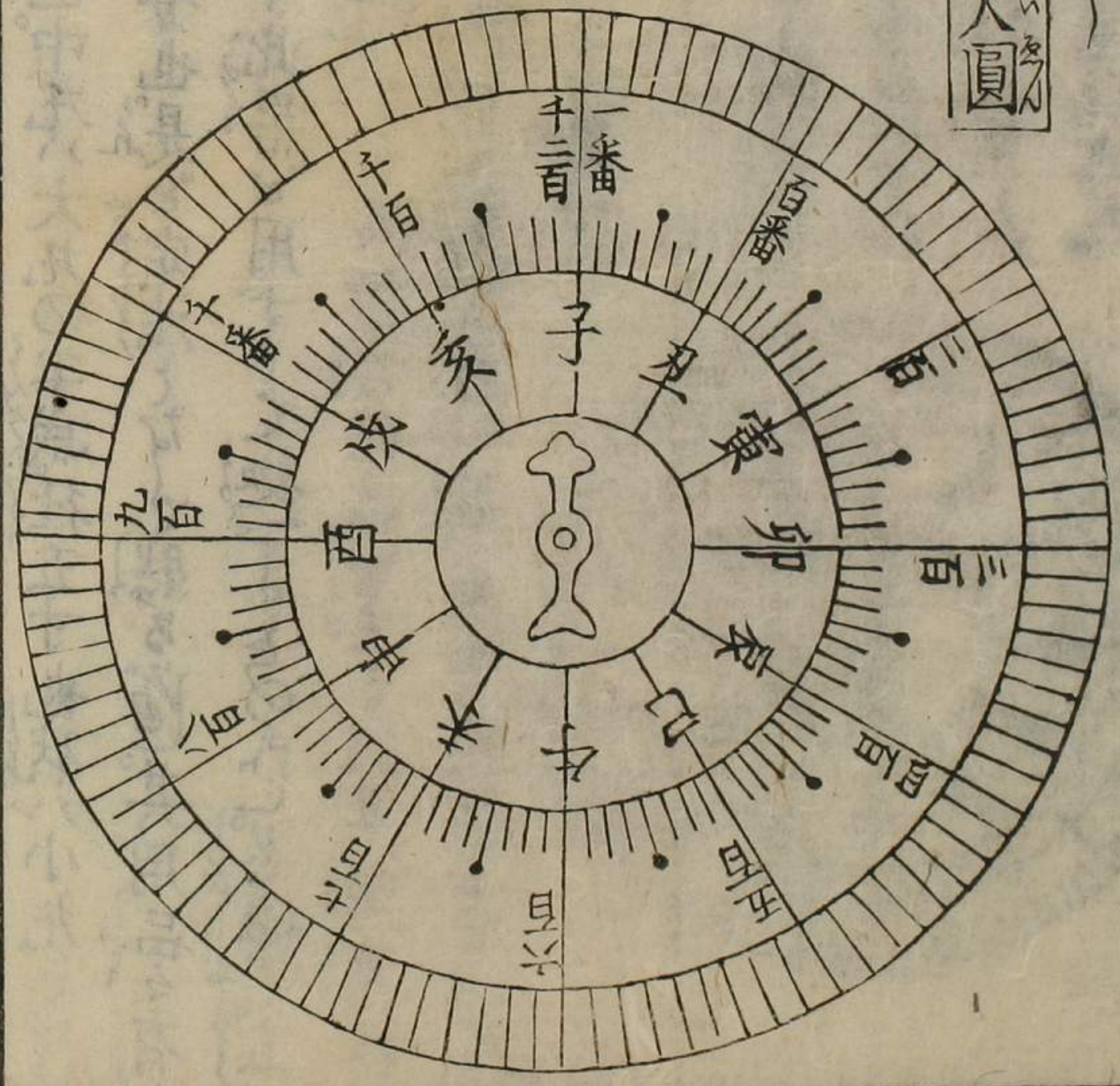
赤銅真中と以て作る。又板目紙  
なごて制し。もあり。大磁石の下に  
敷て。大丸角と均ら。但大業ハ  
此中丸と小丸の代り。用ひ。大丸  
と別ハ徑一尺二三寸。四五寸。又



其品より。徑二尺も制するが吉なり。器械ハ大なるに  
あつてもあつて知るべし

大丸之用並方維大圓

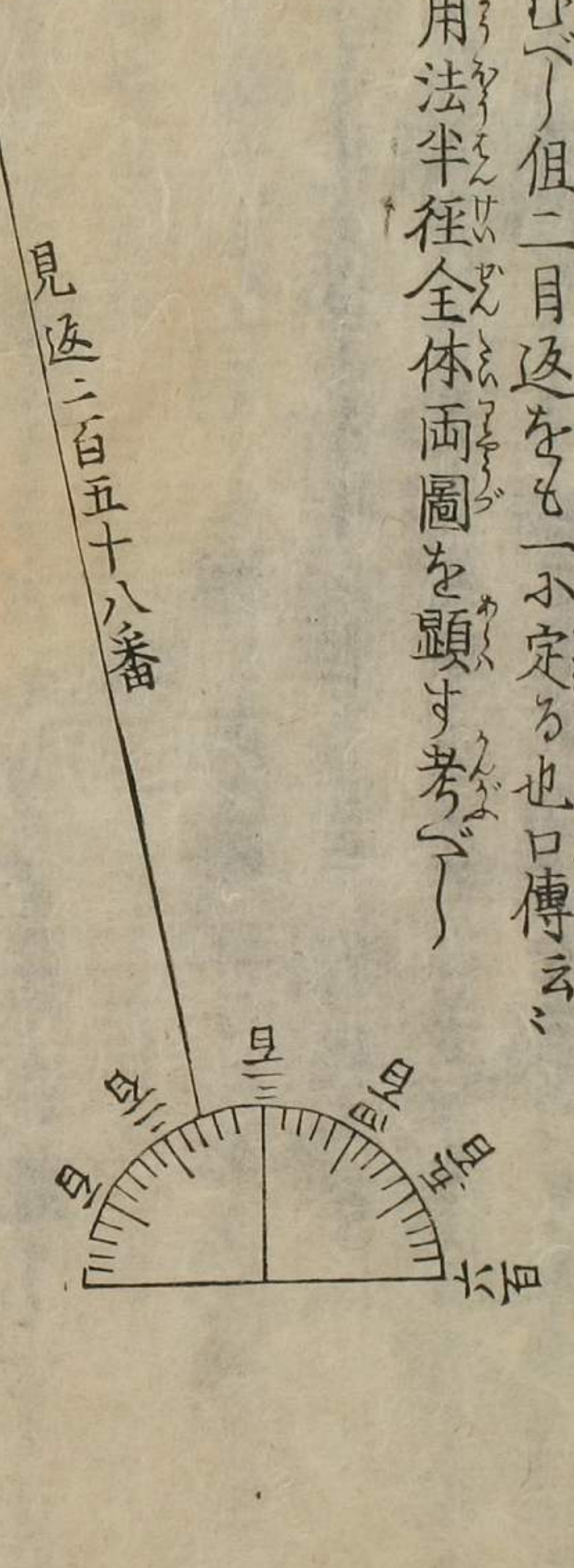
板を以て制す徑一  
尺厚さ五六分。まゝ真  
鍮赤銅と以て制るも  
可。或ハ板目紙と以て  
制す。小丸の下に布て  
用るも可なりと云り。其  
制小丸と大丸制する  
意の器なり。大場を  
勤るふ分厘毛速くふ



見る小便あり。依て大國の圖を制するハ必用也。盤中に  
磁石を居るて勿論なり。圖のどく二段小圖を廻し。内ハ十  
二支其次分線。其次ハ厘線なり。元器はどく針糸なり。ま  
元器のどく。横手ありて。回轉し安れやうに。臺を制す。此  
器を其臺に彫入ること。小丸を元器の上に施す。どくどく  
知るなり

又云此大丸を半より折て用る轉法なり。其理徑捷なり  
隨ふなり。又世ハ方維太目と云も一物別名なり  
大丸の用といふハ先本場也。大丸の一方と見込不當て圖の  
どく。番附をなす。扱二目返も一を先みして見通し。開の  
間數番附小記。扱本日當見返し圖のどく番附なる也  
何時なりとも。其術ハ右の通なり。大丸ハ至極不委し。故小磁

石小塵多き時に用ひて益多しといふ  
或傳ふ曰磁石の塵を論ずる時ハ大丸を以て番附と用の形を  
求ひし但二目返をも一不定る也口傳云  
其用法半徑全体兩圖を顯す考べし



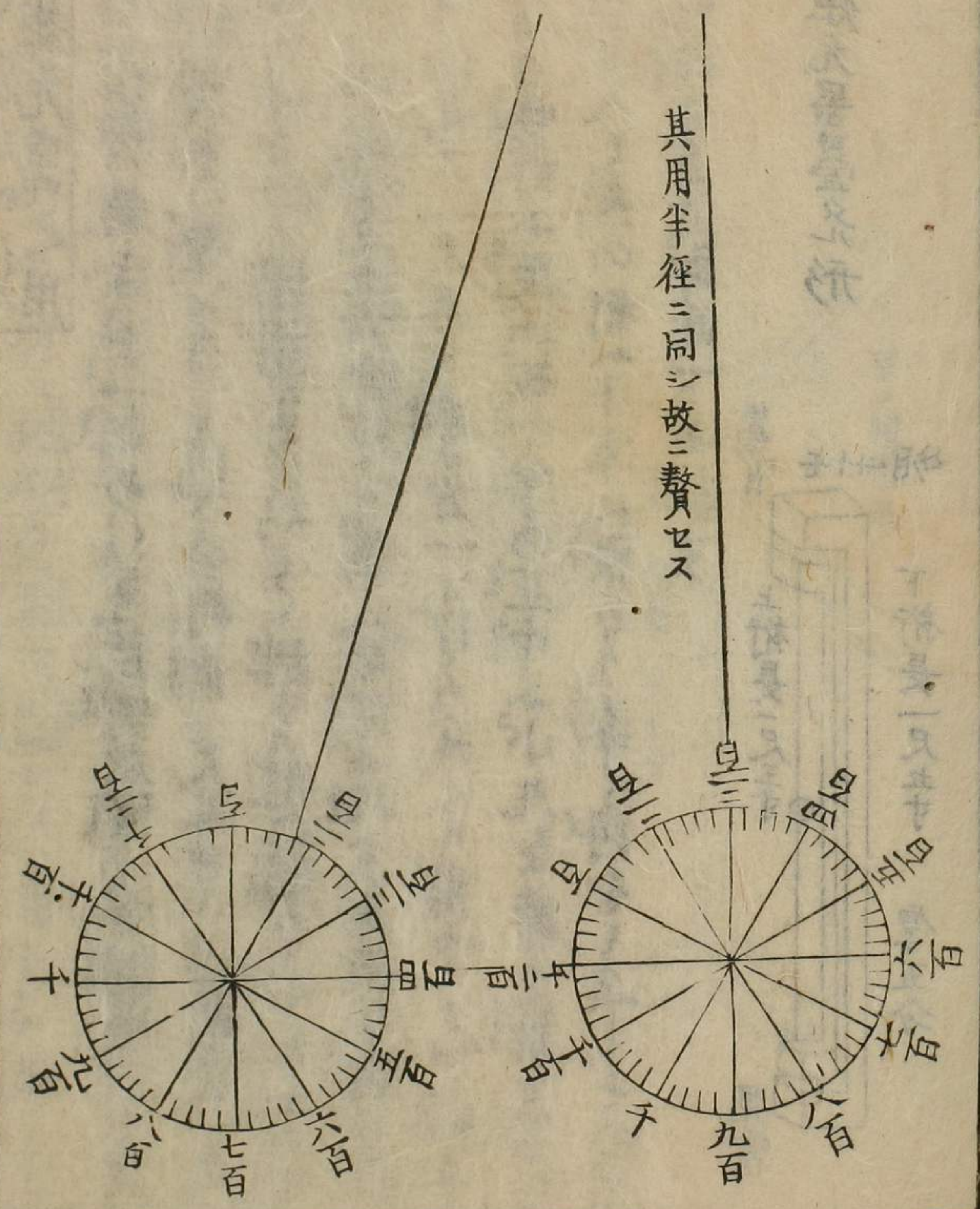
見込一番

三百番  
三尺四寸

見込二百五十八番

見込一番

其用半徑二同シ故ニ贅セス

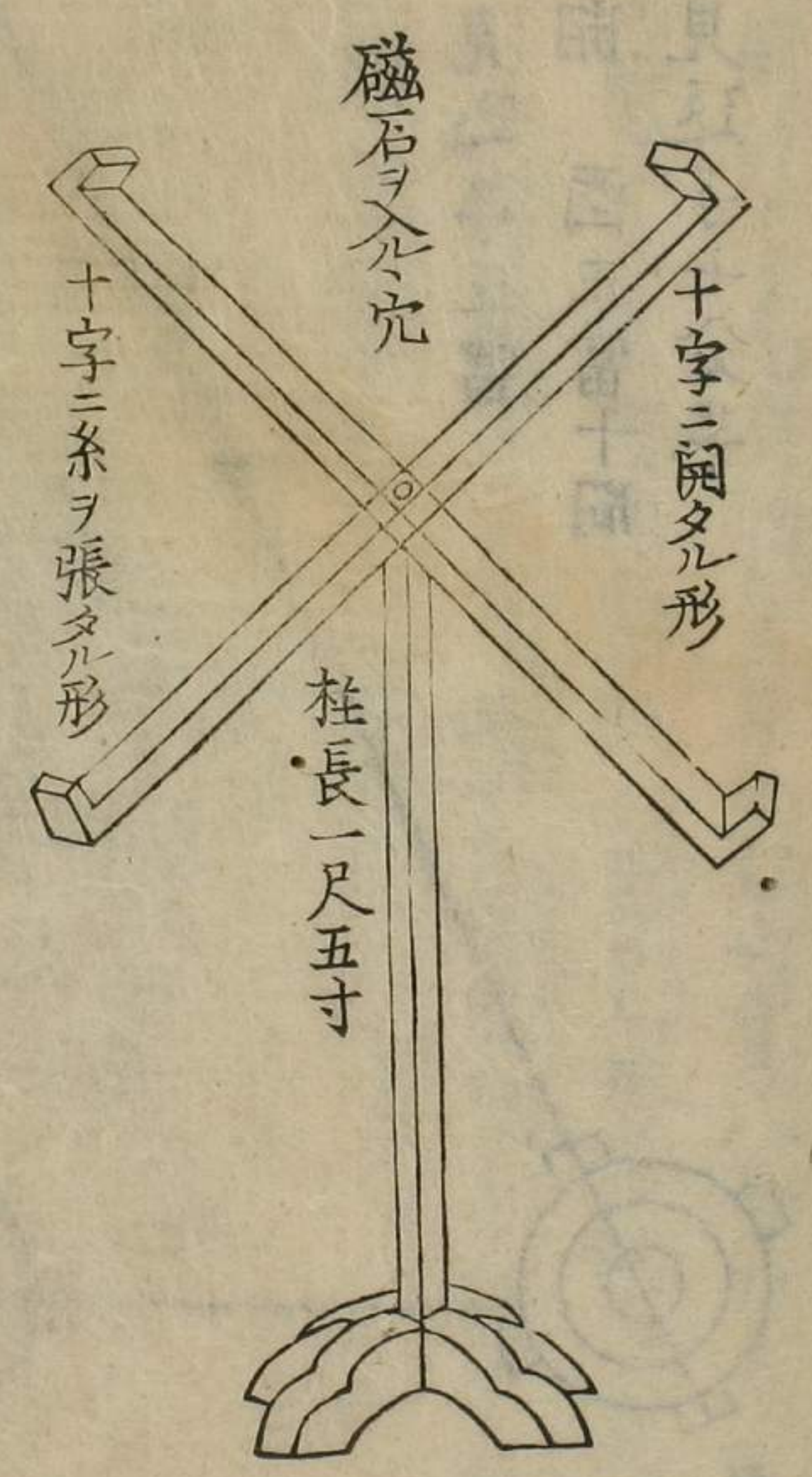
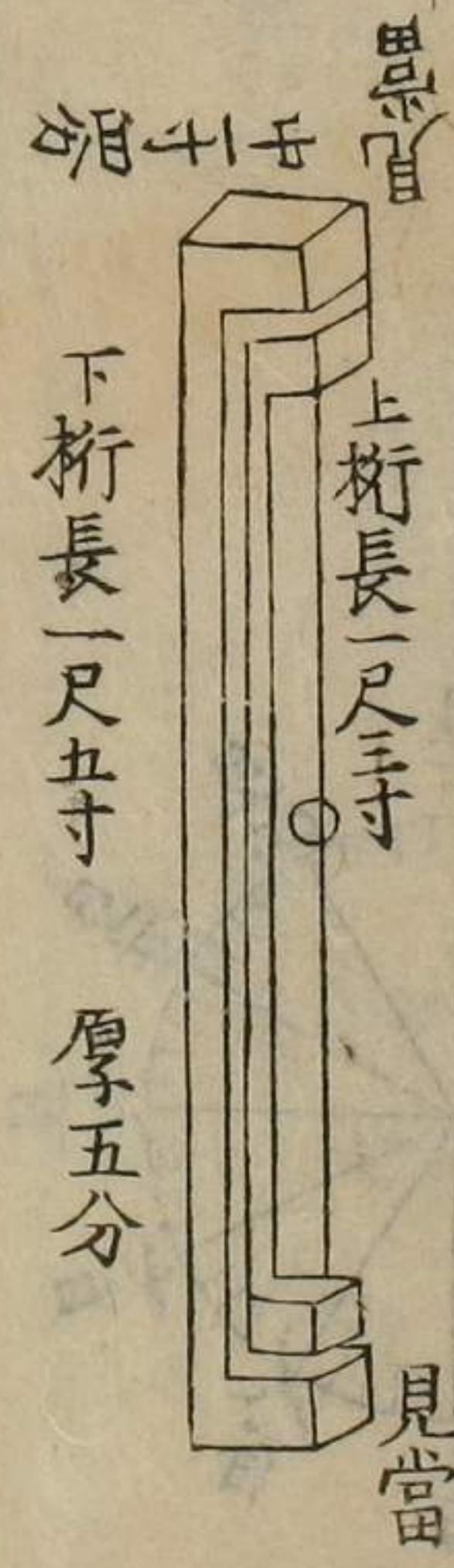




規矩元器之用品

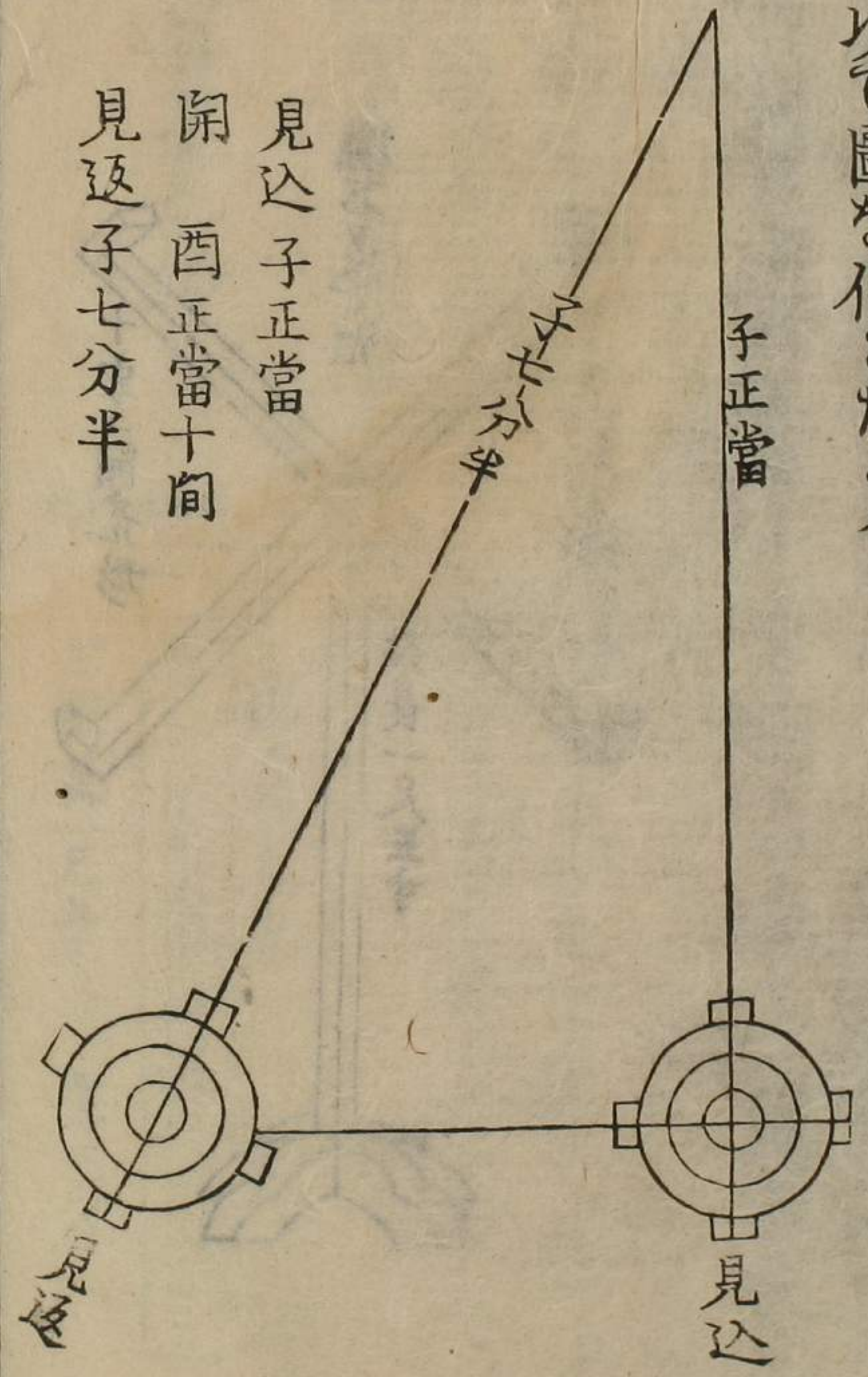
規矩元器ハ新古の二制あり。新制尤宜し。古制用べからば其新制ハ木ハ檜と吉と。下の桁長一尺五寸上の桁長一尺三寸なり。上下開圖をなす。制す。桁の幅ハ上下も。三寸三四分。厚さ五六分。其人の好み任す。此桁を載る柱立柱の長さ一尺五寸。太さ方一寸。凡くも角もすべし。蜘蛛手臺あり。恰好に従ふ。扱十字の正中。小丸を藏る竅と穿ち小丸を入れて糸の桁へ十字に張る。委く図をさす。その用法の詳ある事。即此下ふ記す。

規矩元器器之形



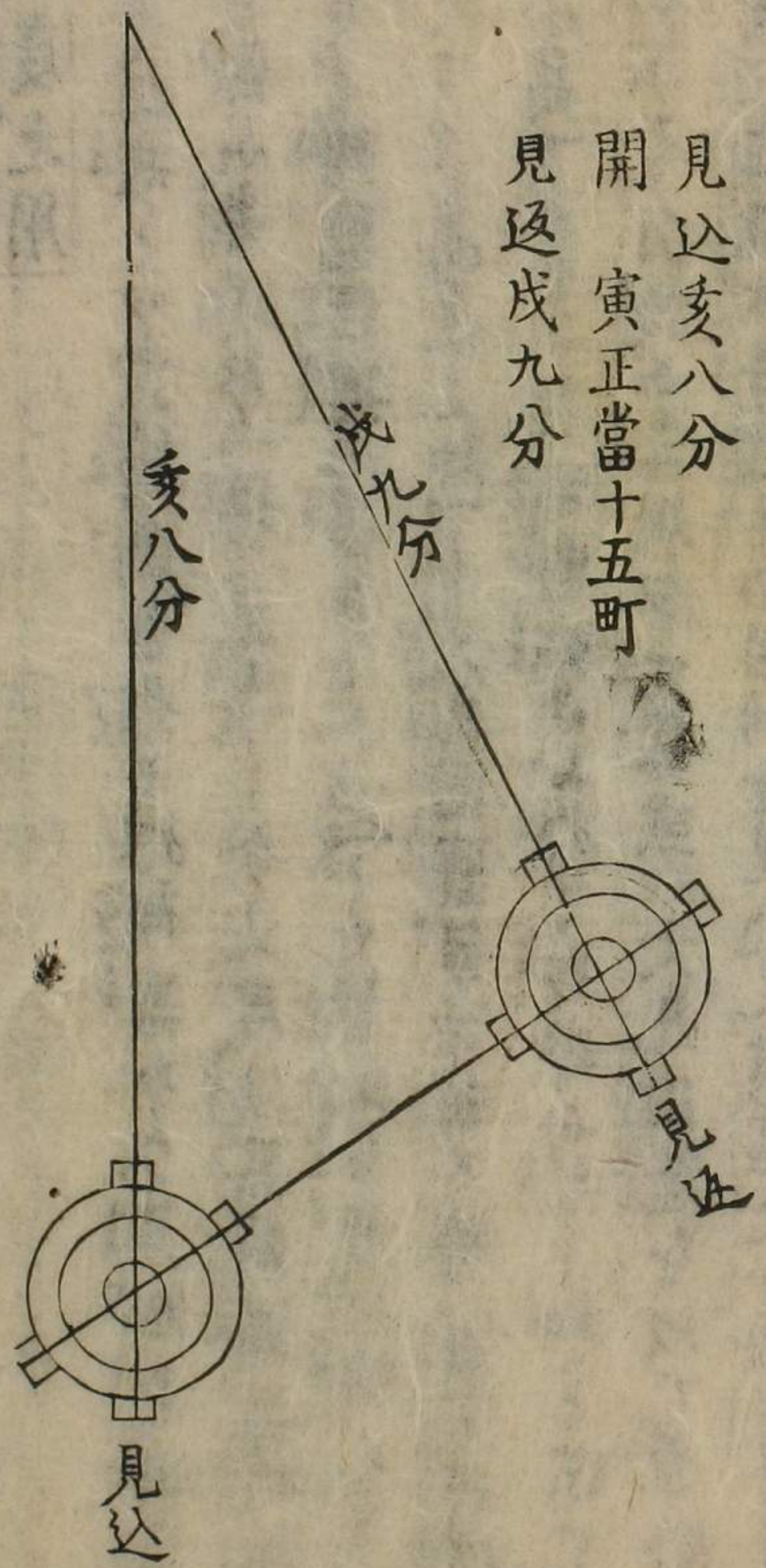
凡此器ハ国圖城圖其外山海の遠程と量る。山林廣大の境を糾す。凡て大業に用る器なり。大丸山盤。大丸とつひ回名あり。其理一般なり。其用や小丸を十字に上ふ施し。十字ヲ開圖して糸線を糾す。今其用をかん。今誠ふ左ふ一二の圖をかりて以て初學に示す。先下に圖するはあはく

元器の本場小立て望所と見込て目的子の正面なり。よつて  
より左の方横直小酉の正當へ開くこと十間開場小至り。本目  
的を見返子七分半。かくのごとく見終つて後小圖のごとく分度  
の矩を以て圖を作らるる



又術曰前術のごとく。目的を見込じ小亥八分なり。是より  
開地寅の正當へ十五町。扱開地小至り。本目的を見返すに  
戌の九分なり。かくのごとく見終つて分度を以て小圖を  
作る。前術のごとく

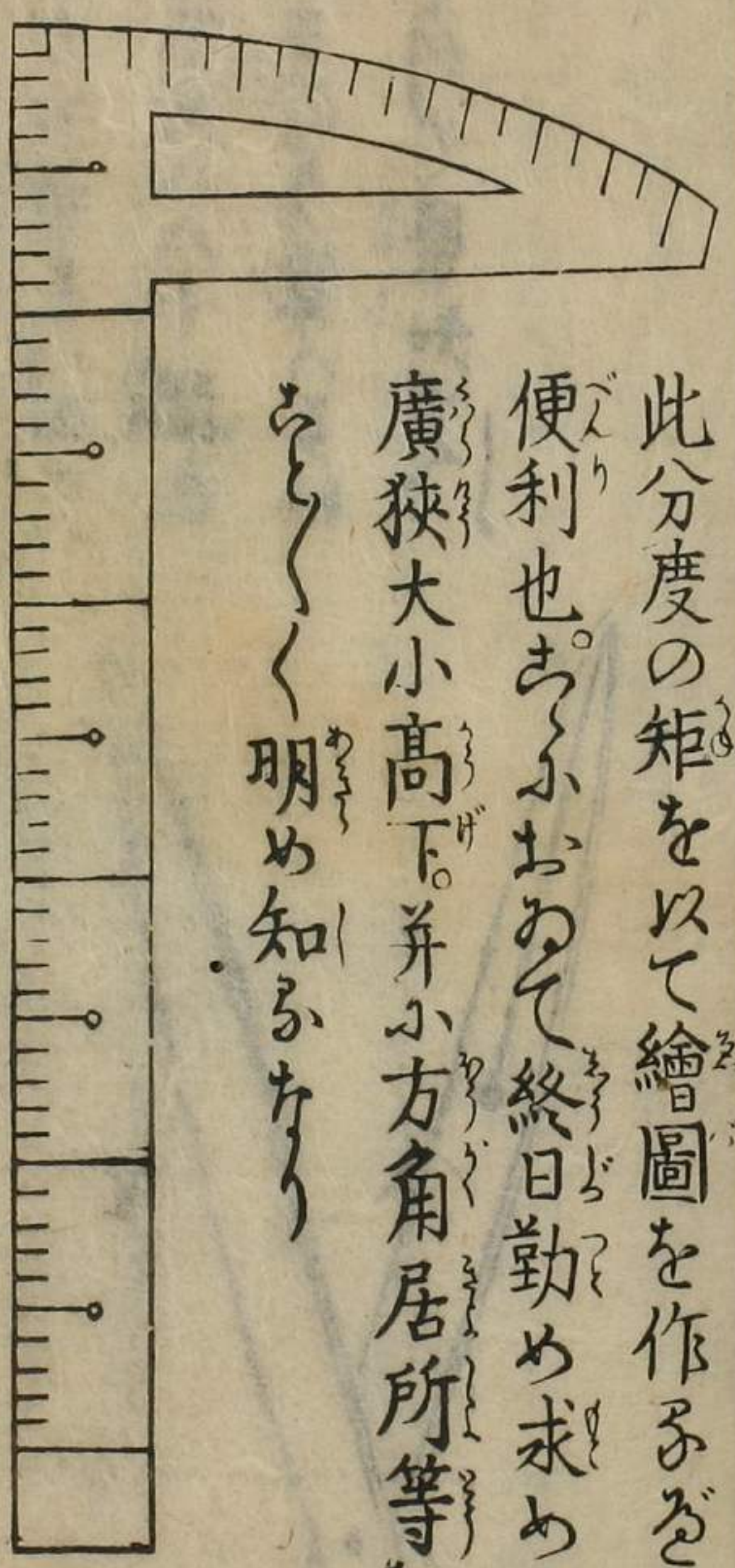
見込亥八分  
開 寅正當十五町  
見返戌九分



分度之用

分度の矩といふハ。繪圖を作るに神器なり。其制前編器  
 械の部小委述たり。往て見るべし。今又虎法器圖寫器折紙  
 方など。繪圖徑捷の器多し。とて。皆此分度の矩より  
 工支せしもの也。と知べし。大凡國圖等と求る時。遠近廣狹  
 大小高下も。其場野外。おわて。即時小糾し。知し。還て  
 便利ふ。あは。故小先規矩元器。或ハ大凡。四盤を以て。原野  
 村里。山岳。森林等。諸方の目的を見込て。其當支を野帳  
 記し置と。又開場幾所。つら。も。其場。に當支と間町と。も  
 同く記し置と。見返の當支をも見込。開場の。と。野帳  
 記し置と。扱を。と。段々。先々の場。ふ。つ。也。かく。の。と。と  
 終日幾度も求め知て。而して。後小。其日。止宿の。所。おわて

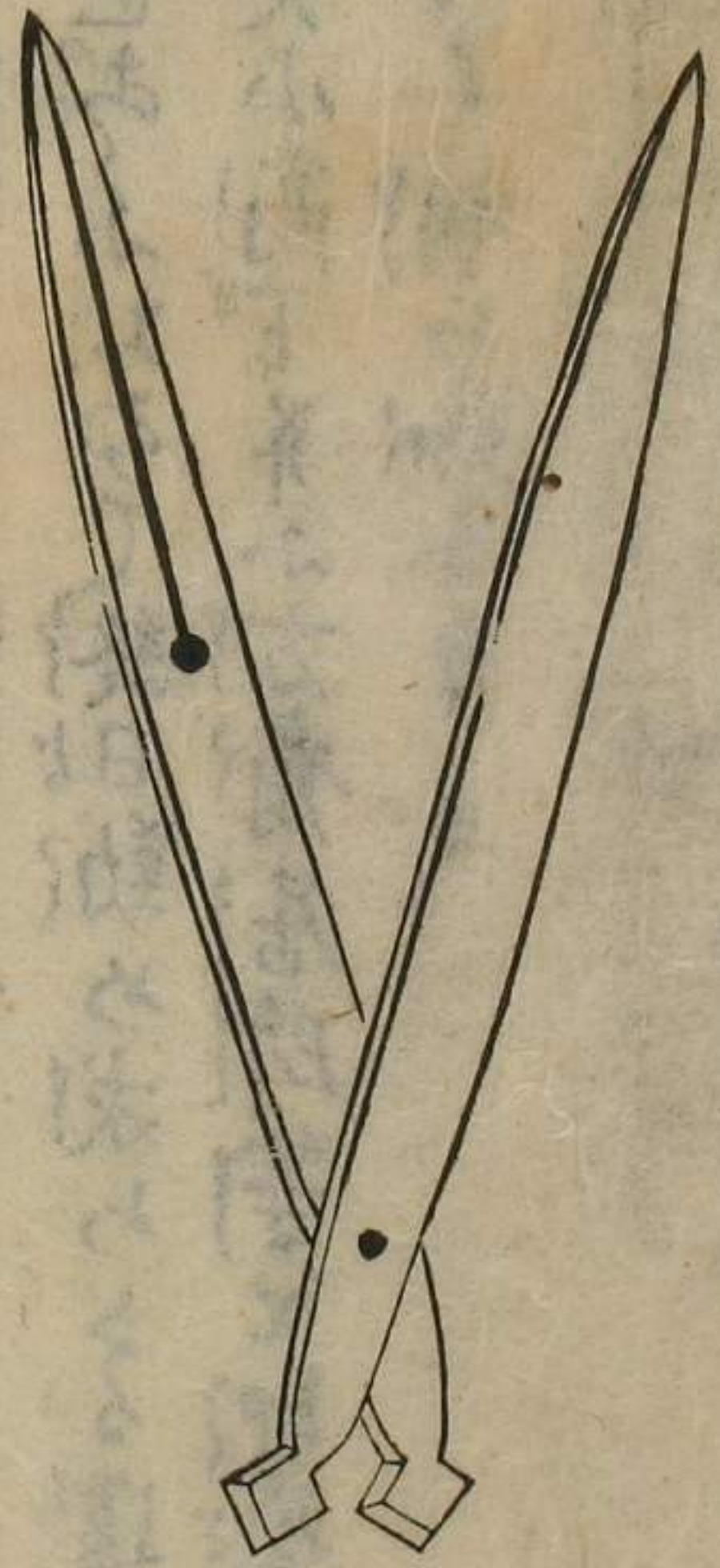
此分度の矩を以て繪圖を作らるゝ。の理  
 便利也。あふ。おわて。終日勤め求め。る。遠近  
 廣狹。大小。高下。并小。方角。居所等。と。即座小  
 と。と。と。明め。知。ふ。なり。



渾発之用并類尺誠定木之用

渾発の用といふハ。此より彼遠程と求めんと欲する時。假令。向  
 方。ある。一間の種と。夾と見る。方尺二尺の先なる。渾発の開口  
 二分。の。向。ま。と。此。遠程。百間。なり。又五尺二寸を種。して。夾と  
 見る。方尺二尺の先なる。渾発の開口二分。の。向。ま。と。の。遠程  
 八十間。なり。遠近。高下。廣狹。淺深。同理。なり。宜く。考。ふ。べし。

又向面小種とかなすべし間尺の知きたる物かた時ハ先何やとも  
 目的を定め是を渾発の口やと夾と前へなるも。後へなり共。或ハ  
 進と。或ハ退と。其開場やと。又以前の種と夾とて。其差口を以て  
 方尺を量て遠程を知らるる。假令ハ初小夾とたる開口二寸は  
 後小進で夾とるる開口二寸五分は。其差口五分を以て。進たる  
 間数二十間あはば。五分の口を。二十間と定め。此口を以て初  
 の二寸と量とば。四夾  
 かる。四夾ハ八十間也  
 と知るなり。餘ハこれ  
 としめて察知すべし

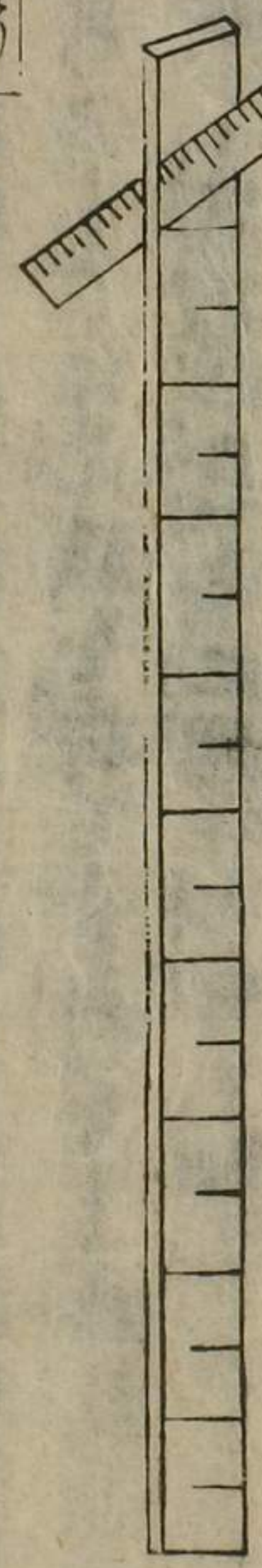


頼尺試定木の制近來好事の者種々の新作をなすといふも  
 一得一失有り。拘泥すべし。今其二品の一とを圖して勘  
 考小備ふ。余ハ準じく知るべし。其用往々小記す故ふまに  
 贅セズ

鎌二尺 或二尺五寸



矩二寸五分或二寸 定木

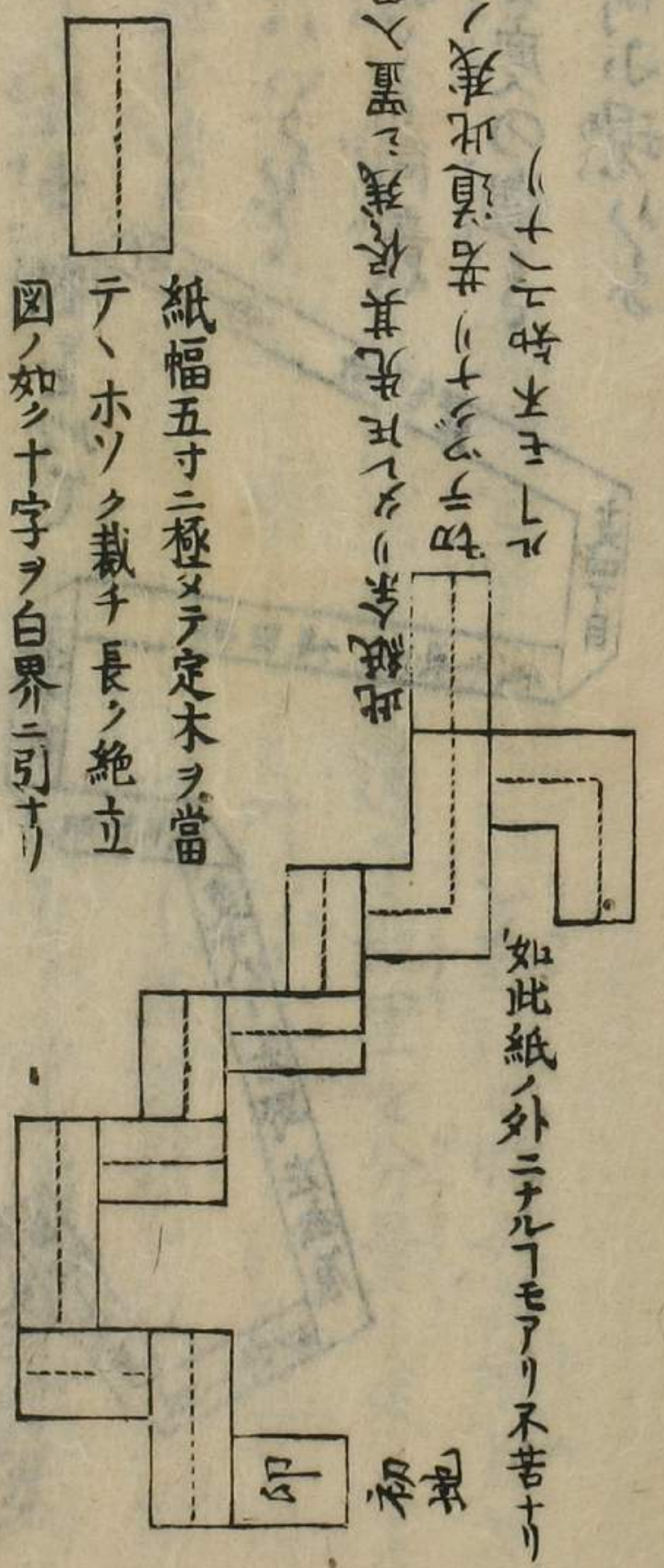


折紙之用

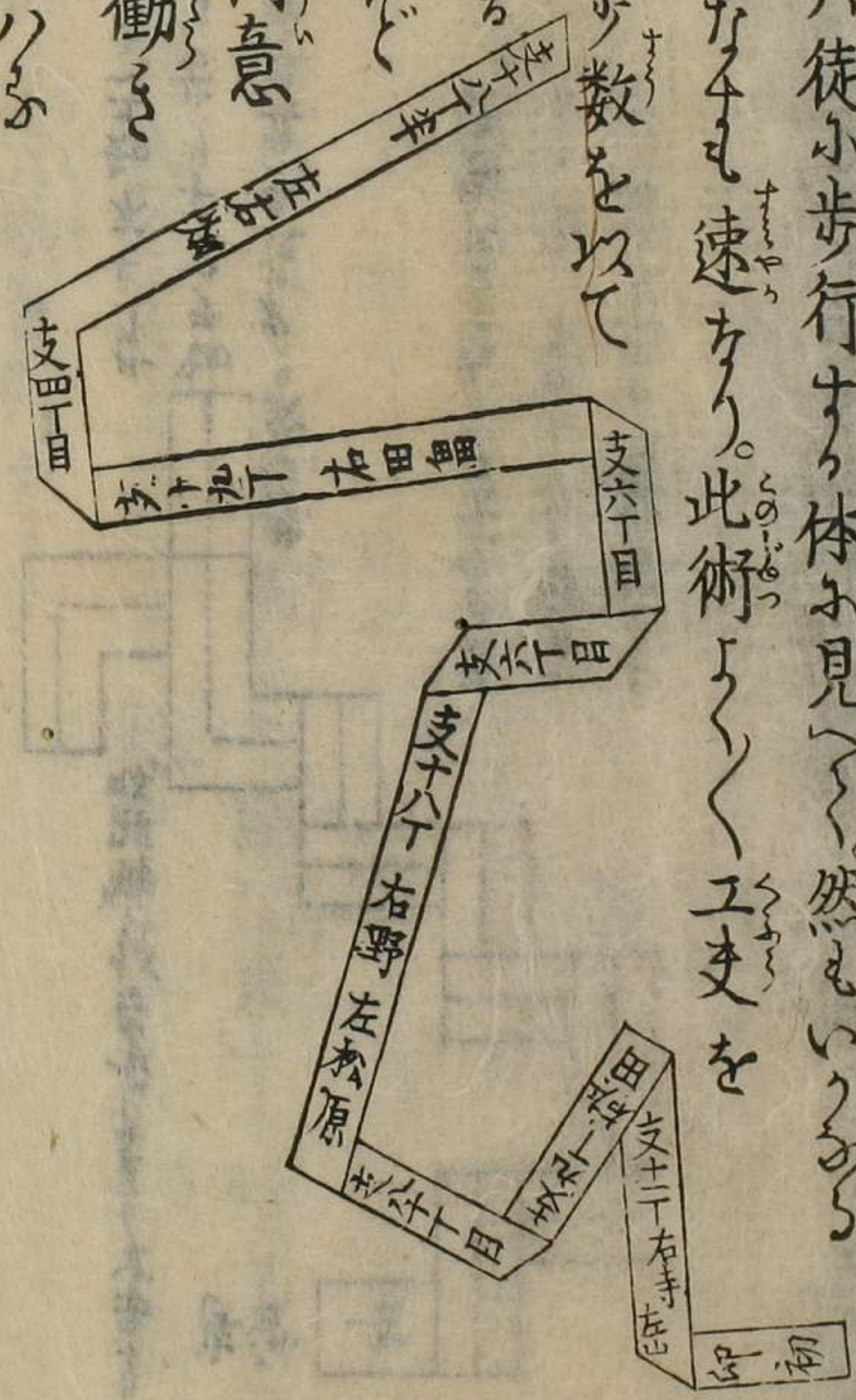
折紙といふハ。紙を長く繼立て歩行かから。立覽器を以て方位  
 と定め。是を折て。其道程の曲直遠近を知術かる。其用法ハ

先程村西内等の厚紙を裁て。豎の正中に白界と引。我が  
 向ひたる初小磁石を以て方位を定め。夫より行歩不随ひて  
 或ハ左右へ廻轉。或ハ斜正に進行すること。道路の曲直  
 應レ其形のどしに此紙を折て歩行なす。路敷を以て其  
 町間と識し。道路の屈曲地理の大概を知ることなり。是他の  
 見聞を忍とれたの用不備やととも。そのよらば遠境  
 国圖の時。用ひて益あり。其折形左ふ圖す  
 扱圖を認る時。分度を以て。初地の支より次第に振出る曲  
 つて紙ふ余るとれた紙を真矩ふ次を跡より段々墨をり  
 四方にたまるや。ふ次てたり。然して圖出来する時。其大さ  
 に紙を繼此折紙を其上ふ重て斜をさす。針を立。其  
 上より篋や。道筋を引たり。

異傳云此術ハ忍の時不用の。出盤元器等の器物なくして。野町  
 の圖を得る術なり。其法程村紙西之内紙等の厚さ。紙幅一寸  
 程小裁て。三四尺小繼立懐中して。假令バ何方よりなりとも。圖  
 と仕立んと思ふ場より。曲目毎ふ其行路の形。准して折下  
 かのどし。圖す。地を画して。後小右の折紙を草圖の紙上ふ



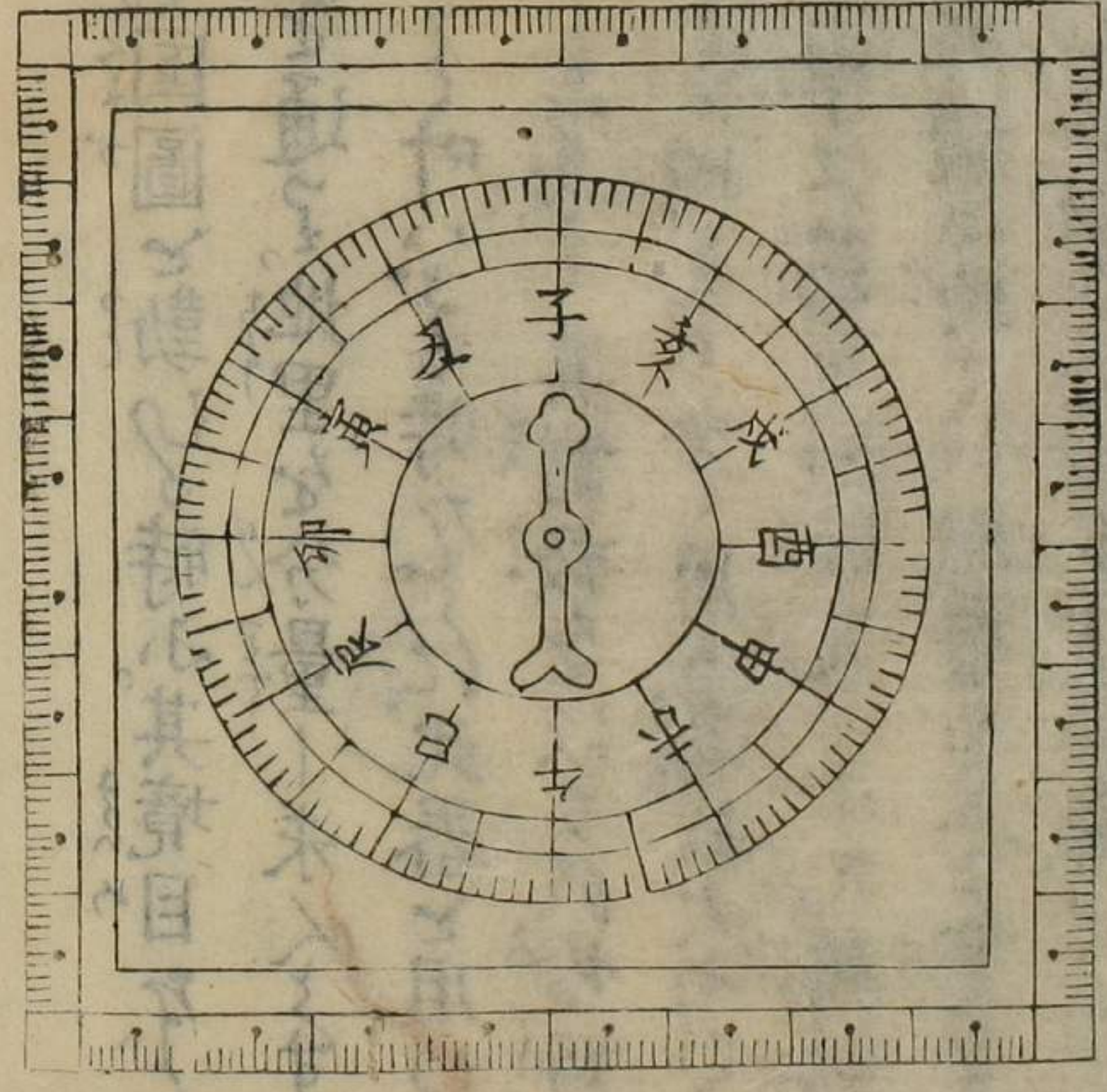
載折目毎の真中と地心と定めて針を以て突て形を寫す  
 る。方角ハ初の地卯へ向う寅へ向う其格小應じて考る  
 間町ハ足数少て記す。二人云合せて一人ハ立覽器と推乃へ  
 一物別名なう。方位を定め一人ハ折紙を勤なう。歩数を記さ  
 ぐ。外面よりハ徒小歩行する体小見へ。然もいある  
 大場の圖をなすも速なり。此術よりく工支を  
 運す。但歩数を以て  
 其長短と知る  
 故小紙ハいふ  
 短く折も同意  
 ちう分度の働  
 又此術小現り



隨川器之用

隨川器といふハ遠境と量る。國圖と勤り時小其境目な  
 くて大河ありて其河の岸を通る地里を分量し求んとす  
 ば山岳俊険ありて攀上るこ叶はざる時な。此器と用の  
 船路を量ると同意なりとる。其制板を以ては恰好  
 大畧方一尺厚一寸許烈し。川など少て用る器故大あり  
 重き。吉といふ。図のどく正中に筋と引逆支の小丸磁針  
 と彫入也。両方に樋を穿ち。此樋小均しく線香を入る如くす  
 是ハ両香を見合せて。恙なくん。或知るためなり  
 其此器を用る法ハ先陸小あり。平町を勤めてなり。こも  
 又ハ間町を量つてなり。近辺の木あり。岩あり。目ち  
 物な。船路の術ハ湊の種のどく。根発の口小合せて置板

船小なりとも筏ふかりとも乗て右の隨川器と船筏の真中へ居へ扱乗出して目的へ種の渾焚の口の合時幾干間過ると知て水上幾町小線香幾分炷と香の炷程を定め扱方角と直見して何の幾分へ幾町何の幾分へ幾町と野帳と總むらう。若渾焚の種とあがた時ハ捨糸の法と用むらう。船路の度数と元來同時みして方角と付け間町を其方角乃違毎に記すまでの異別あり總して河ハ屈曲多きとの

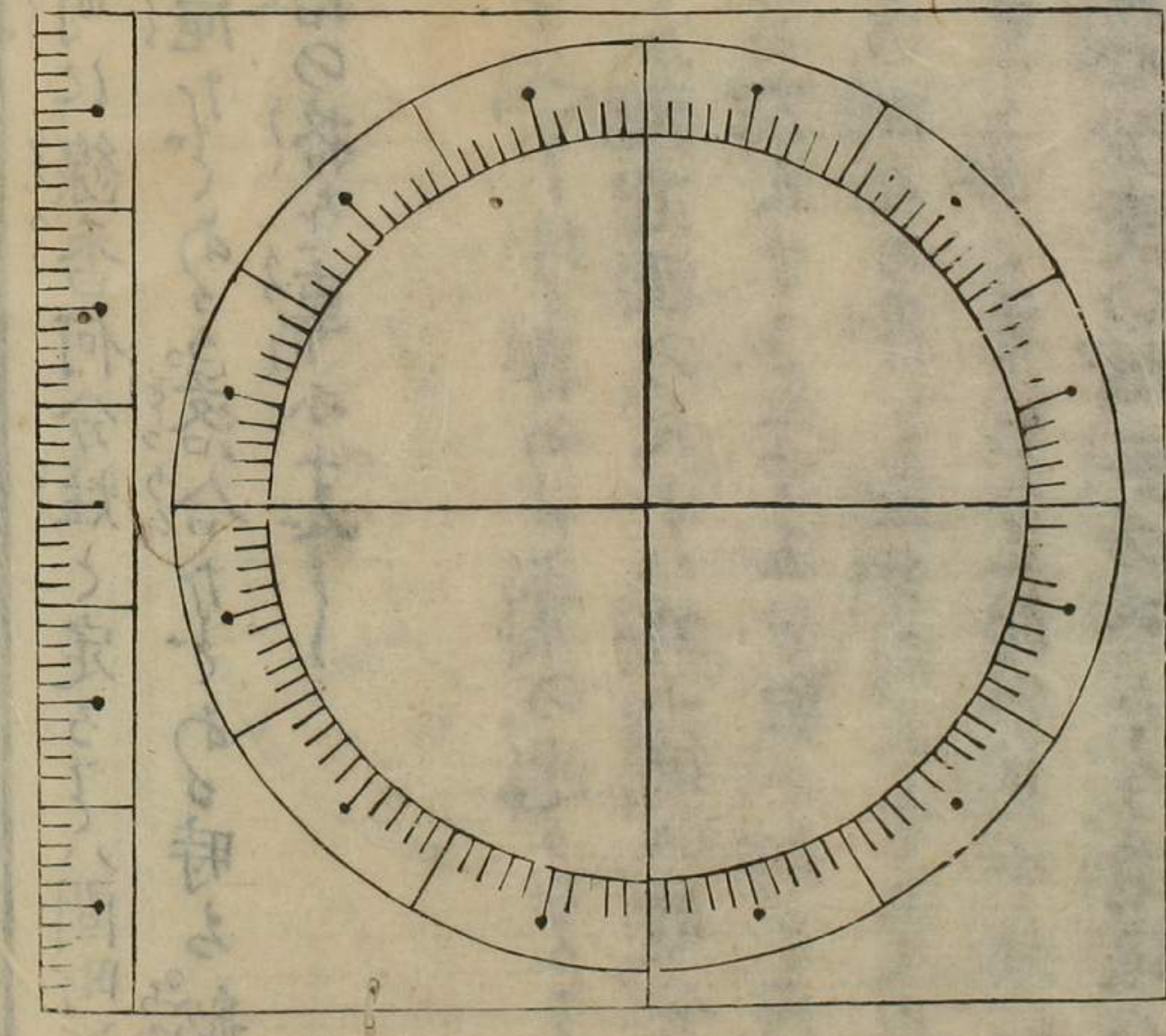


かりぬたりと。初水上幾町に線香何分炷と定るとハ間町と短くして量ること可なり。滝ながあう。落合たあある時ち船足速うなり。其とたハ用捨の格を專ふまじ

虎法器之用

虎法器といハ分度の理を移したる器ありて業の速うなること分度小益す其制作よ云方面山徑の大小ハ好む従い隨分板を選い厚さ四分程小方五寸。五寸五分程小削り内山周と鋸落小削り常の曲尺の罫と盛付向ふ子と定め遣ふ故小圖のく星を付て子と定む。又正面の真中横に針をお糸を引糸の辻地心分度の柄針の格なり造様ハ図をなす時紙を虎法器の方面小合せて何十枚も切紙毎に十字と折帛毎小星を付て向ふ子なり野帳と以て

假令卯の五分へ十町とあつて右の帛一枚を取つて虎法  
 器の下に置に向ふ子と合せ。子丑寅卯と順支小繰り。卯の  
 五分の針を立虎法器と  
 取直して。曲尺の方で十  
 町を量つて知る事。分度の  
 ごとく。又次の分付へ至る  
 時右の帛尽ると此の外  
 の紙を方角と町と合  
 やりに尤向子と外さるや  
 小繰合口して。又前のごとく  
 順支小繰りて分と合せ取  
 直して町と引分度より



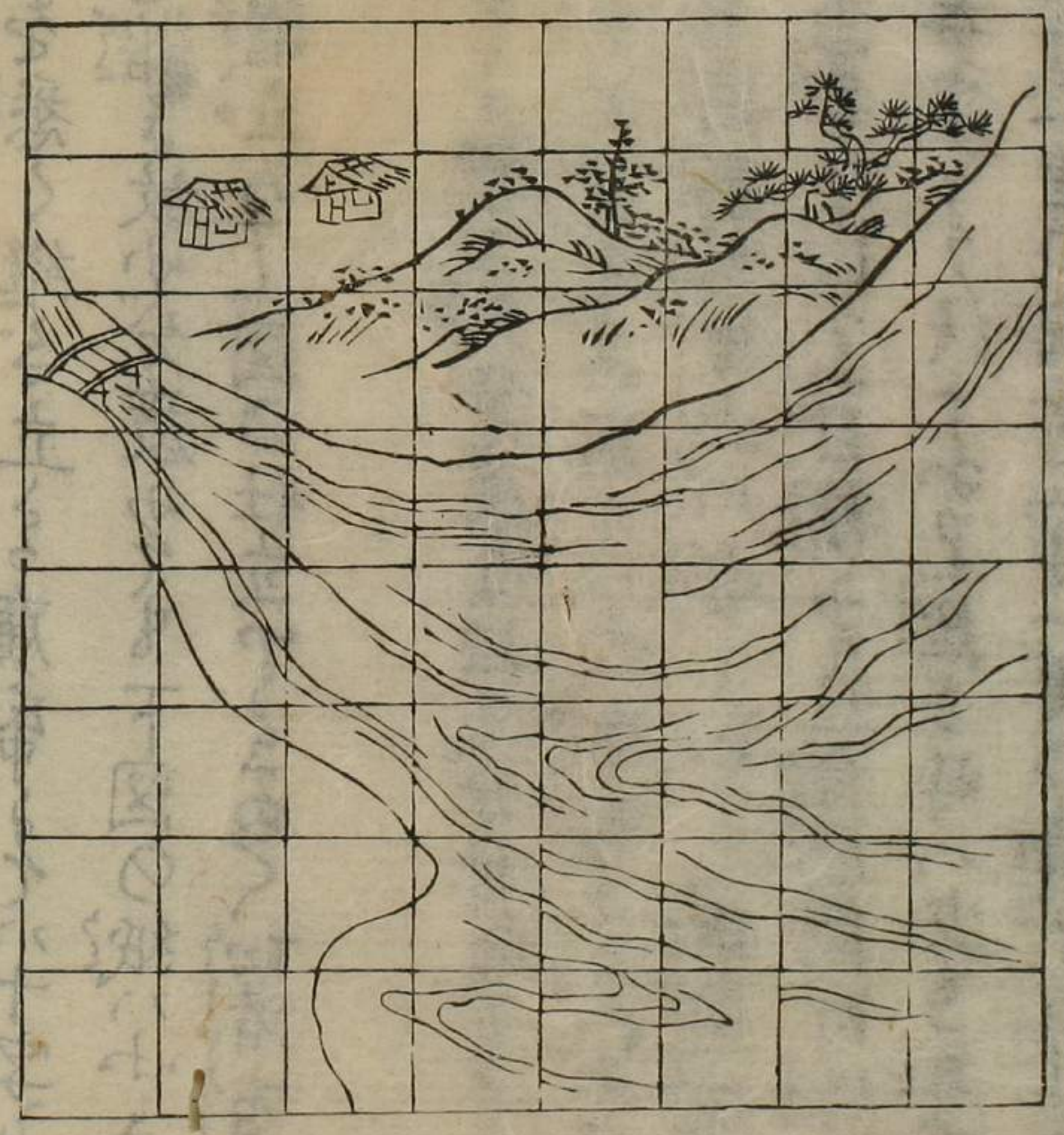
も事速う也。紙を小さく切るとハ十字細して地心糸は合せ  
 り。此為かり。其上下圖を悉く纏ぎ立ると廣帛とてハ十字も  
 差こわり。方角甚合せ難き故小分度あても下図の紙ハ小  
 可也紙の盡る度々小纏立ると。図の仕立やうとて。切者有

圖寫器之用

圖寫器といふハ左ハ圖ナラズ如し。先分度を以て分付のごとく  
 町里と白引して。次小墨を入る也。其用といふハ野帳ふらしある  
 圖風景と以て形を圖し。道筋村里山川委く記して。草図成  
 就する時小。是を清圖ハ寫さしむ。小目積あてハ分厘間町置  
 して。此故小圖寫器とて。其用といふハ。然る時ハ少も差ふ  
 り。其上假令五寸一里の図を二寸一里の積りありて  
 紙をちぢむ等速うなりと



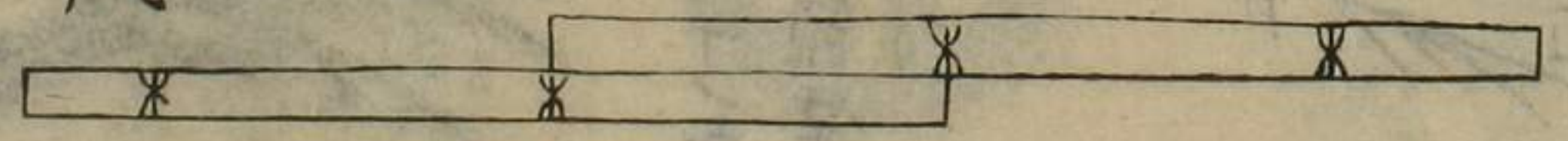
二分三十分四方を削  
 ころ木と四角かき一間を  
 一寸づつ五分づつも定め  
 て糸をとり草図の上置  
 扱清図紙の上も同寸の方  
 と置く上よりいくつめの何  
 処小山峯又川左より幾  
 目小家橋方右の術の目  
 とりて見あつせ又清図を  
 捲一其格小段々うつ一術を  
 除きて形色をもちかへ  
 大を小よちめ小を大の  
 のづこく折目をきりて  
 考ふなり



間竿之用

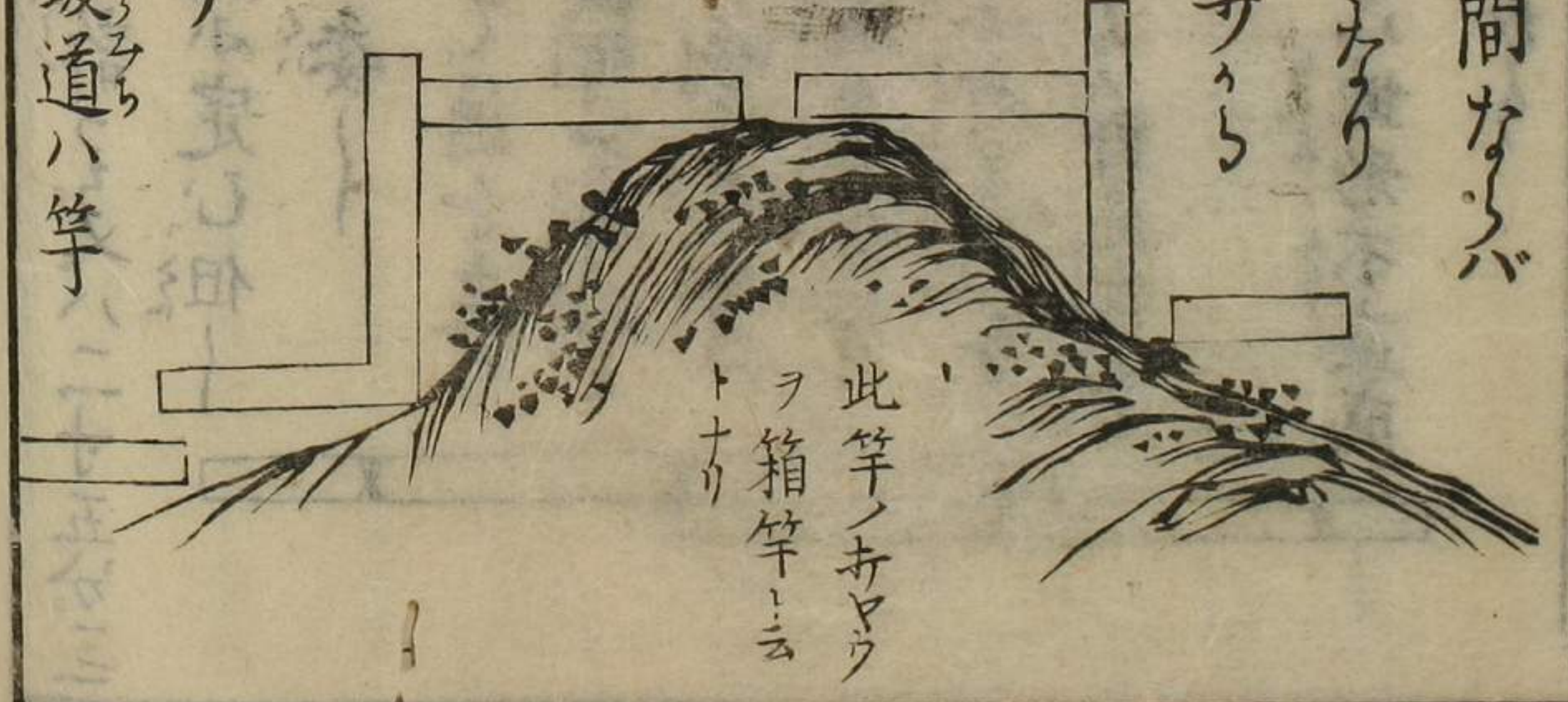
其制桧木を方二寸許る。又ハ二寸五分。二

寸小制るもわり。尤角小削る長九尺小定む但  
 三尺づの所小胴金を入る此制前編小委  
 打様ハ圖のぐく。半間の所を組合せて通を定め  
 ねと竿と打を。但二本を用る也或ハ数町と打行と  
 のも曲るこく。一文字と得たる。然る時ハ平町の  
 地幅を求るが如し。亦五間とも目立ころ坂かどと打  
 時ハ先高を求りて是と鈎小用い扱堅小打て是を  
 絃小用ひて。別傳を以て股と求りべとを。即地幅を  
 求め知るなり  
 又或傳小登竿箱竿といふこり。登竿ハ地形不直成  
 所りて用の高所へ步行堅竿の継アなり



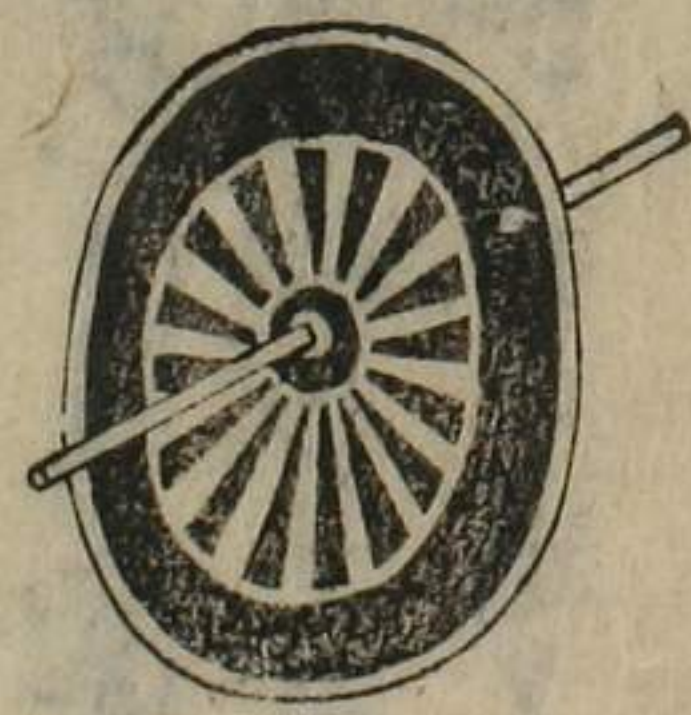
平地ハ繼竿也。棹ハ一間ナルバ七尺。二間ナルバ一丈三尺。品ノより棹用ルル也。規矩ノ法ナリ。差カレを本トスル也。繼竿ハ二本トテサウラ。箱竿ハ品ノより。二本モ持テ。方に削テ。木棹トシ。寸尺を盛付。石壇ナシ。登竿箱竿ト堅。テ知ル。三四五トモ量ル。べし。

或人云此登竿箱竿ハ竿ノ制ハ。あは。おやノノ。上ノ所。謂ト混ズ。又或傳小箱竿トシ。三尺。又或傳小箱竿トシ。三尺。二本。輪竿トシ。物。是器ハ九折。ナリ。山坂道ハ竿。



此竿ノオヤウ  
ヲ箱竿ト云  
トナリ

少シモ繩少シモ。邪斜アリ。間丈。曲物。竹輪。心木。二人。輪。一間。鋸。箱竿。割。間。少。町見を改。時ハ



假令不切者としども。間尺違ひず。況や切者の人ふおのて  
とや所ふより用ゆべし

間繩之用

間繩ハ極上金引の真葶と用ゆ。其例組様前編器械の部ハ  
述べ随分堅く捻て。澁う蟬う塗て。湿氣の徹ざるごとく。制  
すべし。繩の張やうハ撓ざるごとくすべし。撓めば間尺違ふ  
必なり。尤一間毎に白紙を以て綫結付て印を眈合すべし  
大方ハ一町までありて。其より以上ハ又總て前の通り  
張るべし

又錐繩としふものあり。左ハ圖を以てし。形を平錐の  
一間の竿の両端と正中ハ間繩を三筋付て。此三筋の六  
尺下あり。一緒ハ結び合せ。両端の二筋とハ。餘りとて捨



正中の一節と長くして。間繩ハ用也。是を以て正中の其  
物ハ押當て繩を引とれ。少くも斜なく。直にたる也。尤兩  
端の繩何とせても。女も撓るべし。直らざるも。勿論也。

量地指南後編卷之二終



